

日本語副詞の歴史的研究

川瀬, 卓

<https://hdl.handle.net/2324/1398289>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏名 川瀬 卓

論文内容の要旨

本論文は日本語の副詞についての歴史的研究であり、次の三つを課題とする。1) 個別の副詞の歴史を考察することによって、副詞がどのように歴史的に変化するのかを明らかにする、2) 副詞を視点として日本語史の問題に光を当てる、3) 副詞を視点として言語変化に関する新たな知見を得る。これらは、個々の副詞の歴史的变化を記述・説明することと、それをより広い視野から捉え直すということを目指したものである。本論文の特色は、文法の問題をふまえて副詞の歴史的变化を考察するとともに、副詞を視点として文法の問題を見直すところにある。その意味で、本論文は語彙の歴史的研究であると同時に、文法の歴史的研究でもある。

副詞は語彙的側面と大きく関わるものから、文法的側面と大きく関わるものまで実に多様であって、語彙的にも文法的にもさまざまな問題と関わる。また、副詞は歴史的变化が著しく、動的性質を持つものでもある。したがって、副詞の歴史的研究は語彙研究と文法研究の接点となりうるものであり、多くの課題と可能性を持つ。しかし、副詞の歴史的研究はまだ立ち遅れている現状にある。とくに文法との関わりを積極的に意識した研究は十分になされていない。このような状況をふまえて、本論文は語構成的な問題や、副詞と述語との関わりなどの点に注意して、副詞の歴史的研究を行った。

本論文は序論、擬声語・擬態語の副詞を扱った第Ⅰ部、不定語と助詞が結びついて一語化した副詞を扱った第Ⅱ部、そして結語によって構成される。序論では副詞の性質を整理し、副詞研究において歴史的变化を捉えることが必要であることを述べ、副詞の歴史的研究における課題と研究の可能性、および本論文の枠組みについて示した。

第Ⅰ部では擬声語・擬態語の副詞を対象として、副詞形成における形態的な問題や、具体的な意味が抽象化して時間や叙法性など文法的側面との関わりを強める変化について考察し、副詞の歴史的变化の諸相を示した。具体的には語尾「と」の脱落現象の通時的変化、「そろそろ」「ひょっと」の歴史について考察を行った。第1章では擬声語・擬態語における語尾「と」について、近世を通じて語尾「と」の脱落率が増していく過程を示すと同時に、語尾「と」の機能について論じた。第2章では擬声語・擬態語が時間を表す副詞になる事例として、「そろそろ」の歴史について考察した。動きの様態を表していた「そろそろ」が変化の進展を表す用法を派生させ、さ

らに事態を時間に位置付ける用法が派生していくこととその要因について論じた。第3章では擬声語・擬態語が叙法副詞になる事例として、「ひょっと」およびその肥大形である「ひょっとすると」などの歴史について考察した。動きの様態を表していた「ひょっと」が假定や可能性想定を表す副詞になり、さらに近代以降「する」が接続した「ひょっとすると」などの形式になることについて論じた。また、その歴史の日本語史的な位置付けを考察し、「ひょっとすると」などの複合的な形式の成立と定着が、近代語の分析的傾向の事例として捉えられることを述べた。

第II部では不定語と助詞によって構成される副詞を対象として、それぞれの副詞が叙法副詞として確立していく変化、およびそれらの日本語史的な位置付けを考察した。扱った不定語は「なにも」「どうも」「どうやら」「どうぞ」「どうか」である。まず、第4章では不定語の歴史的研究において助詞との結びつきに注目することが重要な観点となることを述べ、考察対象と問題の所在を明らかにした。第5章ではどのようにして叙法副詞の「なにも」が成立したのかに重点をおいて、「なにも」の歴史について考察した。「なにも」が否定との結びつきを強めたのち、非存在文をきっかけとして叙法副詞「なにも」が成立したことを述べた。第6章では「どうも」の歴史について考察した。「話し手の期待の非実現」という結果・結論が不変であることを強調するものであった「どうも」が、「話し手の期待の非実現」が「話し手の期待通りでないことの実現」と読み替えられることによって用法の拡張を起し、さらに「事態成立に対する話し手の判断」という性格をも獲得することを論じた。歴史的事情を考えることで、マイナス評価性、多義性などの問題についても説明を与えた。第7章では〈漠然的認定〉を表していた「どうやら」が、判断的側面を強めて〈推定〉用法を獲得したことを述べた。第8章では「どうぞ」が聞き手利益の行為指示である〈勧め〉を表す叙法副詞となっていくことを示し、対人配慮表現の歴史と関連付けた。第7章と第8章では「どうか」と「どうやら」「どうぞ」の関わりについても考察し、「どうか」が「どうぞ」の変化を促したことも示した。第5章から第8章までで、否定がきっかけとなって起きる言語変化（「なにも」「どうも」）、推定表現を表す副詞になって認識的な叙法との関わりを強めていく変化（「どうも」「どうやら」）、行為的な叙法との関わりを強め、対人配慮の表現になる変化（「どうぞ」「どうか」）について論じたことになる。第9章では助詞の変遷との関連に注目することで、第II部で考察してきた副詞の成立に、係り結びの衰退という日本語文法史上の大きな変化が関わっていることを示した。

結語では本論文の考察を全体的にまとめるとともに今後の課題を述べた。本論文の考察によって、次のような成果が得られたといえる。まず、今まで十分明らかにされていなかった副詞の歴史や、そこに見られる特徴的な現象について、具体的なありようが描けた。また、副詞を視点とすることによって、近代語の分析的傾向、係り結びの衰退との関わりなど、日本語史における様々な問題が見えてくることも示せた。述語形式に注目するだけでなく、副詞と述語形式の関わりを視野に入れることは、今後の日本語史研究において重要な視点の一つになる。さらに、副詞の歴史的研究が、言語変化に関する、より一般的な問題に対して貢献できる可能性も示せた。本論文では、理論的な考察について十分な議論を行ったわけではないが、否定と言語変化との関わり方、文法化、語彙化などに関わる現象を示したことは、今後の研究につながるものであると考えられる。今後の課題としては、さらに体系的な考察を目指して個々の副詞の歴史的变化を扱うこと、示された日本語史上の問題についてその内実を明らかにしていくこと、個別性を超えた普遍的な言語変化の問題としても考察を進めていくことなどをあげた。

以上のように、本論文は、副詞の歴史的研究が多くの問題と絡み合うものであり、きわめて射程の広い研究であるということを示した。